

報告：第3回木曽川流域圏シンポジウム

「御嵩町・産廃処分場問題は終わっていない」

シンポの当日、朝起きるとあたりは雪景色。名古屋で今冬初めての雪が降ったのである。これでは来たい人でも来れなくなる・・・心配しながら会場の名古屋工業大学へ向かって自転車をこいだ。

市村さんの労作になる大看板を正門前に設置。140人収容の大講義室には2枚のスクリーン。2枚目は、登壇者の紹介や木曽川の風景などを映すつもりである。準備に追われているところへ御嵩から来た人たちが到着。御嵩出発の時はまだ吹雪模様だったという。

第1部を始めるころにはなんとか50名ほどが集まってほっとしながらスタート。まずは司会から木曽川に面した急斜面での巨大産廃処分場計画が明らかになって以来、柳川町長襲撃事件が起きたこと、産廃問題に関する全国初の住民投票が行われて計画が止まったこと、今年になって御嵩町産業廃棄物処分場計画地利用指針検討委員会が設置され、恣意的な委員選考や住民投票の結論を揺るがしかねない議論経過があったことなど、14年間の流れを大急ぎで紹介した。次いで、御嵩町住民投票直接請求代表者であり、条例の条文などを書かれた田中保さんから住民投票が行われた経緯について報告していただいた。約90%の投票率で80%が産廃処分場拒否の投票をした、すなわち全有権者の70%が産廃拒否の意思表示をしたことになる。署名運動の当初から1万人の拒否投票を目指していて、そのとおりの結果を得ることが出来たと話された。続いて、前御嵩町長・柳川喜郎さんが立ち、東京都は明治時代に奥多摩などに26000haの水源林を購入したこと、横浜市は大正時代に山梨県道志村に2800haの水源林を購入し、戦後になって道志村にゴルフ場立地問題が起きた時に水源基金を設置して道志村の応援をしたこと、甲府市も富士川上流に水源林を持っていること、一方名古屋市は大正3年に木曽川の水利権をタダで手に入れたのに水源林を持っていないし、木曽川上流に対してほとんど何もやってこなかったことを指摘された。また、木曽川の水を一滴も飲んでいなくて高価な飛騨川の水を引いている御嵩町民が、安い木曽川の水をジャブジャブ使っている名古屋など下流域住民の飲み水の安全に配慮した投票を行ったことが改めて確認された。(なお、出版されたばかりの柳川さんの著書「襲われて - 産廃の闇・自治の光」(岩波書店)が受付に並べられたが完売した。)

みたけ産廃を考える会で処分場反対運動をしてこられた岡本隆子さん(現御嵩町議)からは、御嵩町産業廃棄物処分場計画地利用指針検討委員会設置の経緯や、そこで行われた議論、「利用指針のための基本的考え方(案)」とそれに対する「御嵩産廃を考える会から提出した意見書」、「利用指針(案)」(シンポ資料として配布された)などについて説明があった。「利用指針(案)」に対しては18通の意見書が寄せられ、そのうち14通が「小和沢に産廃関連施設を造らないことを明記すること」を求めていること、それを受けて利用指針原案の結語で「住民投票の結果を尊重して利用計画を策定」とされていたのが「産廃処理施設を設置しない」と明確な表現に改められたことなどが報告された。

さらに岡本さんは壇上から「この会場に御嵩町役場の職員と可児署の公安担当刑事がいる」ことを明らかにし、会場に緊張が走った。「やっぱり御嵩産廃問題はまだまだ終わって

いない」ことが参加者一同に実感として感じられた瞬間であった。そもそもどうして公安の刑事が市民団体主催のシンポジウムの監視をしに来るのだろうか。もしかしたら誰かに買収されているのかも・・・？（ちなみに、彼らは第1部終了時点で姿を消した）

小和沢の生物調査を13年間余り、合計159回にわたって続けてきたスズサイコの会・梅北征子さんの報告は圧巻だった。サシバ、オオタカ、ノスリ、ハチクマ、クマタカなどの猛禽類、キクイタダキ、ウソ、ミゾゴイ、コノハズクなど・・・次々と登場する鳥たち、小和沢は実に豊かな鳥たちの棲みかとなっているのだった。植物に関するデータも鳥に負けない豊かさを示し、絶滅が危惧される植物が多数確認されていることが明らかになっているが、盗掘を恐れて写真が映されなかったのが残念だった。「スズサイコの会」と御嵩町民中心の「オオタカと美しい自然を守る会」が続けてきた膨大な調査記録は、「小和沢利用計画指針のための基本的考え方（案）」に対する意見書でも大きな役割を果たした。検討委員会はこの貴重なデータについて議論しなかったし、御嵩町役場も評価しようとしていないのは残念なことである。専門家の調査ではないというのが彼らの言い分のようなのだが、分類学や生態学の分野では在野の研究者、卓越したアマチュア研究者が果たしてきた役割は大きい。レッドリストなどの基礎データでもそれらは大きな貢献をしているし、万博開催をめぐって揺れた海上の森の環境アセスメントでは専門家の調査結果の誤りがお母さんグループの調査で次々と明らかにされたことは記憶に新しい。そもそも、牧野富太郎やファーブルだって在野の研究者だったのである。

第1部は名古屋市の水源林に関する提案を総合討論への宿題としていったん締めくくり、休憩をはさんで第2部のみんな演奏に入った。間伐材で製作された創作楽器「みんな」を、創作者である川合ケンさん自身が演奏してくれるという貴重な時間である。華奢に見えるが意外に堂々とした音である。イマジンなど数曲が演奏され、最後は「ふるさと」を参加者も一緒に合唱して終わった。

第3部は、「生物多様性と木曽川流域圏」と題して流域各地で活動するグループや個人からの報告である。2010年10月に名古屋市で開催される生物多様性条約締約国会議COP10では、木曽川上流域の生態系サービスであるおいしくて安全な水や、農林産物を享受する下流域都市圏の責任として、上流域支援の義務が議論されるべきであるという文脈で設定されたテーマである。

トップバッターは徳山ダム反対運動を中心的に闘ってこられた近藤ゆり子さん。つい最近出版された「徳山ダム導水路はいらない」（風媒社）の著者でもある。生物多様性に関連して、利用のメドが立たない徳山ダムの水を890億円もの追い銭をして木曽川まで運び、湧水時に木曽川中流域のヤマトシジミを塩害から守るという怪しげなこじつけ（環境維持用水というらしい）をひねり出した国土交通官僚どもの浅知恵（悪知恵）の紹介をされた。そもそも長良川河口堰建設によって長良川のヤマトシジミは壊滅状態になっているわけで、その下手人どもが木曽川のヤマトシジミを守るといふのだから笑止千万である。

その長良川河口堰のまずい水を飲まされている知多半島・東浦町で木曽川水源への復帰を訴えている神谷さん（東浦町議）は、工業用水に回されている木曽川の水を都市用水（飲み水）の管路に流し、長良川の水を工業用水に回すというスワッピング案を図入りで紹介した。すでに管路は全てつながっていて、単にバルブを切り替えれば良いだけの話なのである。現実に長良川上流で化学薬品が流入した時は緊急時対応ということで知多半島の都

市用水が木曾川水源に切り替えられたことがあったそうである（2000年の出来事）。水問題はハードでなくソフトだけで解決できることが多いという指摘はとても重要である。水利権をふりかざして水の調整と融通をしようとしないう国土交通省や愛知県企業庁は、実に莫大なムダと不条理を生産し続けている。神谷さんの報告でもう一つ素晴らしい指摘があった。「洪水と旱魃は防げない」である。すでに国土交通省は100年に一度来るような洪水は防げないことを認めるようになったが、100年に1度の旱魃については今だにダム建設の言い訳にを使って、調整と融通を認めようとしていない。もうダムの時代ではないのである。造りすぎたダムの補修だけでも莫大なお金とエネルギーが必要なのであって、これ以上のダムを造るべきではないのである。これほど説得力のある神谷さんの意見書案が、東浦町議会で自民党と公明党の反対にあって6:13で否決されたそうである。

日進市、豊明市、三好町などでつくる中部水道企業団が2001年から1トン1円の水道水源保全基金積み立てを開始し、毎年3000万円のお金を王滝村などの木曾郡木曾広域連合に送っている。東郷町議の山口洋子さん、第2回木曾川流域圏シンポジウムで聞いた水源基金について東郷町議会で提案したそうである。この提案を聞いていた別の議員が中部水道企業団の議会で提案して水源基金実現の運びになったのである。さらに東郷町では、名古屋市・御岳市民休暇村に宿泊する町民に1泊2000円の補助金を出したり、王滝村に間伐枝打ちボランティアを送ったりしている。この市民休暇村は名古屋市の行政評価でCランクとされ、廃止すべき施設リストに載せられてしまっている。しかし、人口が1000人を切り、公債比率が夕張市を超えて日本一となって苦しむ王滝村にあって、市民休暇村が約100人を雇用しているという状況を考えれば、名古屋市の都合だけで簡単に廃止を決められるべきではない。名古屋市による水源林としての買取、あるいは、名古屋市との飛び地合併なども視野に入れた王滝村支援策が考えられるべきだろうという話も出た。（このあたりで川合ケンさんは、来年夏あたりに休暇村を舞台にしたコンサートを企画してはどうだろうかというアイデアがひらめいたそうである・・・懇親会でうかがった話）

「流域自給をつくる大豆畑トラスト」の歴史も10年を超えた。全国にいくつかある大豆畑トラストが遺伝子組み換え作物を食べたくない、輸入や栽培をやめさせるための運動であるが、ここ木曾川流域のトラストはまず「流域自給をつくる」ことを最初に掲げている。この運動を提案し、流域を回って生産者を探し回った故由利厚子さんの呼びかけ文が紹介された。きっかけは御嵩町に計画された巨大産廃処分場問題だったのである。この問題が起きたことによって、流域全体とりわけ下流域から上流域を見るまなざしに覚醒させられたと由利さんは書いている。

最後は主催団体である木曾川水トラストの木亦さんから、御嵩町での森林ボランティア活動の報告であった。住民投票の後、下流域で集まった寄付金600余万円を御嵩町に役場に持参したところ、当時の柳川町長から御嵩町内に森を買うことをすすめられたことに端を発して、トラストの森「水源の森・みたけ」が誕生し、隣接する民有林で間伐や枝打ちの練習が始まったこと、間伐材で総ヒノキの小屋が建ったこと、3年前からは御嵩町有林3haの整備を引き受けて、毎月2日間ずつの御嵩通いが続いていること、間伐材の木材市場への出荷実験やパルプ材としての出荷なども行っていること、御嵩町のイベント「環境フェア」や「みたけの森祭り」などにも出展して町民との交流を図っていることなどが紹介された。

シンポジウム開始以来 4 時間近くが経過し、参加者に疲れが見えてきた頃ようやく最終の第 4 部突入。司会がこれまで出た話の簡単なまとめをした後、フロアに発言を求めた。まず、藤前干潟を守る会代表の辻淳夫さんが立って、貧酸素水塊が発生する伊勢湾三河湾の惨状を修復するためには藤前干潟を守るだけではだめで、集水域とりわけ上流域へのまなざしと行動が必要であることに気がついたこと、そのことを契機として伊勢三河湾流域ネットワークが結成されたことなどを話された。本日の資料として配布されたものの中に、このネットワークから出された流域宣言があり、そこでは流域をバイオリージョン（生命圏）としてとらえ、下流から上流を支援する仕組みづくりを求めていることが紹介された。

続いて名古屋水道労組の渡辺泰委員長から興味深い以下の発言があった。実はすでに名古屋水道労組から名古屋市当局に対して水源林保全の提案がなされている。1914 年（大正 3 年）に始まった名古屋市の水道事業が、2014 年で 100 周年をむかえるので、その記念事業として水源林保全を、格好のテーマとしてほしいと願っている。ただし、木曽川沿線 400km のうちどこに水源林を求めるべきかとなると簡単には決められないだろう。これまで名古屋市が上流自治体として交流事業などを行ってきたのは名古屋市が事業に参加しているダムのある自治体（味噌川ダムのある木祖村や岩屋ダムのある下呂市など）を中心に取り組んでいる。木祖村においては水道局職員の研修が行われ、水道労組も間伐や枝打ちの活動を行っている・・・さらに続けて、柳川さんが紹介された水源林を持つ自治体、東京都や横浜市は独自のダムも保有している。名古屋市も戦時中に藪原ダム建設計画を立てたが、その後沙汰やみとなった。

渡辺さんの話はなおも続いた。名古屋市水道の年間収入は 498 億円（上水分のみ、そのうち給水収益は 459 億円）河村市長は 5 億円規模の水道料金値下げを提案しているが、その分を水道職員の人件費ほか行財政改革によってカバーしようとしているのだそうである。木曽川が町内を流れているにもかかわらず木曽川の取水権がない御嵩町では、名古屋市民の 2 倍以上の高額の水道料金を払わされている。安全でおいしい木曽川の水をジャブジャブに使っている名古屋市民の水道料金を下げるのではなく、苦しむ上流域を支援するために値上げする、あるいは水源基金として余分に徴収して上流域に送る、あるいは水源林を購入する方向に進むべき時なのである。このことを市民の側から提案し、実現に向かって積極的に進んでいくべき時なのである。このシンポジウムの終わりにこうした貴重な情報を提供していただき、木曽川水トラストの目指すべき今後の方向性が明確に提示されたように感じられた。その方向性のもとに、御嵩町の皆さんとの連携を一層強め、同時に木曽川上流域全体とのつながりも求めていく必要がある。

学内の別の教室を利用して開かれた懇親会にも多くの方に参加していただいた。準備不足にもかかわらず、盛りだくさんで消化しきれないくらいの課題と報告者を詰め込んで開催したシンポジウムであったが、結果的には充実したものとなった。報告者の皆さん、参加された皆さん、スタッフで頑張っていたいただいた方々など全ての皆さんに感謝したい。それらの皆さんとともに、今後は一層、流域の協働と、上下流間に存在する不公平、不条理の解決を目指して進んでいきたい。（大沼淳一記）

<当日のプログラム>

期日：2009年12月19日(土) 午後1:00~午後5:30

会場：名古屋工業大学F1講義室(資料代：500円) 参加者：約50名

第1部 パネルディスカッション「御嵩町・産廃処分場問題は終わっていない」

パネラー：前御嵩町長・柳川喜郎さん、御嵩町住民投票直接請求代表者 田中保さん、御嵩町議 岡本隆子さん、小和沢の生物調査を12年間余りにわたって続けてきたスズサイコの会 梅北征子さん、(コーディネーター：大沼淳一)

1. パネリスト紹介、柳川さん著書「襲われて」の紹介も、
2. 御嵩産廃問題の経緯：大沼
3. 住民投票の経緯：田中さん、柳川さん
4. 小和沢計画地利用指針検討委員会の経過と結果：岡本さん
・・・「御嵩産廃を考える会の意見書」「基本的考え方」「利用指針」が資料配布された
4. 小和沢の動植物調査結果：梅北さん
5. 小和沢をめぐる現状分析と今後の方向性：柳川さん

休憩 -

第2部 木曽川にゆかりの音楽

創作楽器「みんな」奏者：川合ケンさん

第3部 流域からの報告「生物多様性と木曽川流域圏」 (司会：岩城美智子さん)

1. 「徳山ダム木曽川連絡導水路反対運動から」：近藤ゆり子さん
2. 下流域で長良川河口堰から木曽川水源への復帰を求めて発言をしている東浦町議：神谷明彦さん
3. 中部水道企業団の水源基金を実現する契機をつくった東郷町議：山口洋子さん
4. 「流域自給をつくる大豆畑トラスト」の歴史と活動について(代理発表：大沼章子さん)
5. 木曽川水トラストの森林整備活動と水源の森の紹介(木亦信之さん)

第4部 総合討論：上流域の生態系サービスを楽しむ下流域都市(名古屋)の責任

(司会：大沼淳一)

終了(5時30分)

<当日の写真>



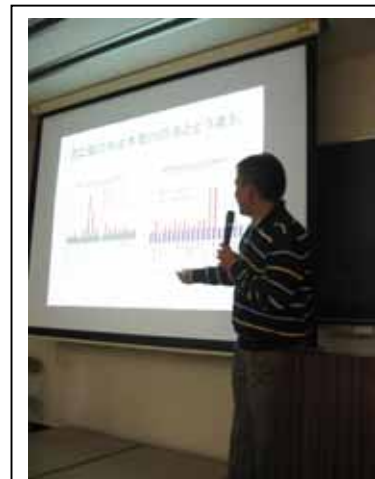
パネリストの皆さん（左から柳川さん、田中さん、岡本さん、梅北さん）



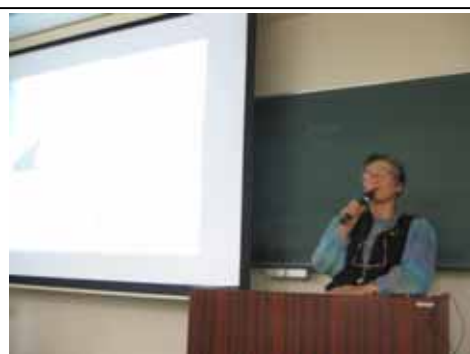
近藤ゆり子さん



会場風景



神谷さん



山口洋子さん